

示範教材で示された行為の理解がその後の実施に及ぼす影響 看護技術演習での効果的な学習を目指して

小山聡子 樽 淳子 倉井佳子 菅原真優美 佐藤信枝

新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

Effects of understanding of the action shown by demonstrated teaching materials on the subsequent practice by students

—Toward more effective learning from teaching demonstration on nursing skill

Satoko Koyama, Junko Motai, Yoshiko Kurai, Mayumi Sugawara, Nobue Satou

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

Abstract

In teaching demonstration of nursing skill in the course of basic nursing of which the author is in charge, students are instructed to observe demonstrations by the teacher, then practice it according to the sequence shown. However, if they are to practice without recognizing many elements that are contained in such demonstrations, their actions result in mere imitation, interfering with self-motivated practice. It was hypothesized that if the student is given an opportunity to re-confirm the technical key points or the intention of a certain action after observing a model video, their subsequent practice will be more effective. Thus the following experiment was conducted. The subjects were composed of 37 first-year students attending a nursing university. They were assigned tasks: removing the wash from a washing machine and drying it. It was found that compared to the subjects who started working immediately after watching the video, those, who worked after watching the same video and answering the questions on the question sheets confirming the appropriate method and sequence of the work as well as its purpose, indicated a higher rate of performing the desired actions while at the same time tended to work in a more hesitant manner. It was indicated that by providing an opportunity to re-confirm the technical points after observing demonstration material (but before actual practice), we will be able to show an effective method for students to take independent actions to satisfy the purpose or the original intention of an assigned work.

Key words

teaching demonstration, basic nursing skill training, nursing student, imitation learning

要 旨

筆者らが担当する基礎看護学の技術演習では、教員によるデモンストレーションを学生に観察させた後に、手順に従って実施させる方法をとっている。しかし、デモンストレーションに含まれる多くの要素を認知できないままの実施は単なる模倣にとどまり、主体的な実施を阻害する。そこで、示範ビデオを観察後、技術ポイントや行為の意図について再確認する機会を得ることができれば、その後の実施が効果的になると仮定し、実験を行った。方法は看護系大学1年生37人を被験者とし、洗濯機から洗濯物を取り出して干す作業を課した。その結果、示範ビデオを観察後、適切な作業順序や作業方法、行為の意図について確認するための質問シートに解答してから作業を実施した被験者は、示範ビデオの観察後にそのまま作業した被験者と比較して、適切な行為の実施率が高くなる一方、迷いながら作業している様子がみられた。示範教材を観察後に技術ポイントを再確認する機会を実施前に与えることは、手順をイメージしながらも、主体的に目的や原則に沿って実施するための方法として有効であることが示唆された。

キーワード

示範 基礎看護技術演習 看護学生 模倣学習

はじめに

筆者らが担当する基礎看護学領域の技術演習は、学生が入学後始めて看護の実践を体験的に学習する場である。従来から、事前に講義や事前課題で必要な知識と技術ポイントを関連づけて提示し、演習では説明を加えながら教員のデモンストレーションや視聴覚教材を観察させた後に、手順どおりに実施してみる演習方法をとっている。初心者が手技を習得するためには、基本的な手順に従って、模範となるものを模倣してみることは有効である。

しかし、デモンストレーションで示される看護の機能を遂行するための一連の行為には、多くの要素が含まれている。例えば、対象者への説明や対象者の状態の確認、プライバシーへの配慮、安全の確保、効率よく必要な作業するための環境や物品の準備、適確な手順と手技、実施後の確認と後片付けなどである。学生は、それらを事前に学習してきた技術ポイントや手順と照合しながら、逃さず観察し記憶しようと努力する。観察し記憶したことを整理しないまま、あるいは、認知できなかったポイントを残したままであるならば、学生は思考が混乱した状態で実施に臨むことになる。また、デモンストレーションを観察しても、その行為を形成している意図や技術ポイント、目的などを読み取れないままの行動は、単なる動作の模倣にとどまり、演習での主体的な行動を阻害する。例えば、「自分がこれをするために必要な物品を準備する」のではなく「手順書に書いてある物を集める」ことに懸命な学生や、教員の台詞どおりに患者役の学生へ声を掛けてしまう学生が見られることがある。

基礎看護技術演習のデモンストレーションにおける学生の認知については、事前に学生のレディネスを高めて認知を促す方法について報告されている¹⁾。しかし、デモンストレーションの後に、必要な要素の認知を強化・修正して、その後の実施に導く方法についての報告はみあたらない。

そこで、示範観察後に模範行為の意図や技術ポイントを再確認できる機会を与えること

がその後の実施にどのような効果を及ぼすのかを検討するために、示範ビデオの観察・示範ビデオ観察後の確認シート記入・その後の行為の関連性を検証する実験を行った。

研究目的

示範教材を観察後、行為のポイントや意図について再確認する機会を得ることが、その後の実施に及ぼす効果について検討する。

研究方法

示範教材として洗濯物を干す作業の示範ビデオを作成し、呈示される行為のポイントや意図を再確認する方法をビデオ内容の確認シートの記入として、実験による比較検討を行った。

1. 被験者

看護系大学1年生のうち、研究参加の同意を得た37人を被験者とした。

被験者は入学して初めての看護技術演習であるベッドメイキングを受講して2～4日目だった。ベッドメイキングでは、効率の良い作業のためにリネンや作業環境を使いやすいように整えることや、リネンを衛生的に取り扱うことを指導されていた。

2. 実験課題

日常的に行われていて被験者が作業方法や作業目標を想定しやすく個々の知識の差が少ないこと、作業が準備・実施・片付けの一連の過程を通して目的を持って遂行されること、実験題材として扱いやすいことを考え、洗濯物を干す作業を取り上げた。

被験者は、研究者の1人が洗濯物を干している場面を撮影した示範ビデオを観察した後、実際に洗濯物を干す作業を実施することを求められた。

3. 実験設定

実験室には洗濯機、ワゴン、かご、ハンガー、洗濯ばさみ、物干しが置かれ、洗濯機には脱水が終了し絡み合った状態の洗濯物が入

っている(図1)。被験者が実際に干した洗濯物は、バスタオル1枚、フェイスタオル2枚、枕カバー2枚、病衣1着で、病衣以外の色は全て白だった(表1)。

被験者の行動記録は、固定カメラ1台による撮影と、観察者1人によるチェックリスト方式の記録用紙記入により行った。

4. 実験手続

被験者は予め2種類の条件群に振り分けられた。

「確認シートなし群」18人は、課題の説明を受けて示範ビデオ観察した後、課題を実施した。

「確認シートあり群」19人は、課題の説明を受けて示範ビデオを観察した直後に、適切な作業順序や作業方法、行為の意図について確認するための質問シート(以下、確認シートとする)への記入を求められた(表2)。質問は17問あり、解答は選択式で、正解は示されなかった。

被験者は各群7人~8人一組で、実験室とは別の部屋で課題の説明を受け、示範ビデオを観察した。両群とも、示範ビデオ観察の前に、「洗濯物は洗濯機に入っており、その部屋にあるものは何を使ってもよい。手本となるビデオを1回だけ見せるので、よく見て参考にしてほしい。ただし、実際に干してもらう洗濯物の種類や数量は、示範ビデオと異なる可能性がある」と告げられた。また、上手く干すためのポイントが書かれた用紙が一人ずつ手渡され、読むように指示され、示範ビデオ観察後にその用紙は回収された。その用紙には、干す前の準備として3項目、干し方として3項目、後片付けとして1項目が記載されていた(表3)。

示範ビデオ観察後から実施までの待機中は、他の被験者と会話しないう指示された。

作業の所要時間の制限は課されなかった。しかし、実験の観察時間は5分間であり、5分たったら作業途中で終了とされた。

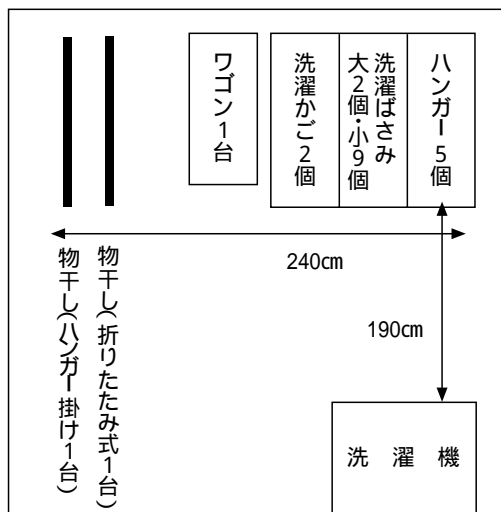


図1 実験設定

表1 示範ビデオと実験設定の差異

	示範ビデオ	実験
洗濯物	横シャツ(白) 1	大判バスタオル(白)1
	バスタオル(ピンク) 2	フェイスタオル(白)2
	フェイスタオル(白) 4	枕カバー(白) 2
	ウオッシュクロス(白)4	甚平式病衣上下(青) 1
	ポロシャツ(白) 1	
	半そでシャツ(白)1 甚平式病衣上下(青)1	
物干	折りたたみ式 1	折りたたみ式 1
	ハンガー掛け 2	ハンガー掛け 1

表3 事前に提示された作業ポイント

お手本ビデオを見る前に 上手に干すポイントが書いてあります。ビデオを見ながら確認してください。	
1. 干す前の準備 洗濯物の分量の目安をつける。 洗濯機から取り出しながら、種類と量を確認する。 必要なものを近くに準備する。	2. 干し方 しわを伸ばし、型くずれないように干す。 種類ごとに分けて、乾きやすいように干す。 洗濯物を床につけない。
	3. 後片付け 使わなかった物を、元あった場所に戻す。

表2 確認シート

ビデオ内容確認シート	
1. どのような順序で作業をしていましたか？順番にならべてください。 使う道具を準備する 洗濯物をかごに入れる 干す 洗濯機の中を見る 干したものを点検する	() () () () ()
2. 洗濯機の中を見たのはなぜだと思いますか。当てはまる方に をつけてください。 () 洗濯物が入っているかどうかを見るため () 洗濯物の量を見積もるため	
3. 洗濯かごはどこに置いて作業していましたか。 () 床の上 () ワゴンの上段	
4. 洗濯機から洗濯物を取り出すときに、かごはどこに置いてありましたか。 () かごが置いてあった場所の近く () 洗濯機の近く	
5. 洗濯かごに洗濯物を入れるときに、どのようにしていましたか。 () 取り出した順番にどんどん入れていた () 種類別に仕分けしながら入れていた	
6. 洗濯かごに洗濯物を入れながら何を考えていたと思いますか。 () とにかく速く取り出すことを考えていた () 洗濯物の種類を確認し、それらを干すために必要なものを見積もっていた	
7. 干すために準備した物全てに をつけてください。 () 物干し () 洗濯ばさみ () ハンガー	
8. 洗濯物を干すときに、かごはどこにありましたか () もともとあった場所の近く () 洗濯機の近く () 物干しの近く	
9. 洗濯物を干すときに、どのようにしていましたか。 () ハンガーや物干しにどんどん掛けていった () しわをのばしながら干していた	
10. 洗濯物を物干しに掛けるとき、どのようにしていましたか。 () 無駄がないよう、間隔を空けずに干していた () 乾きやすいように、間隔を空けて干していた () 干す順序は洗濯物の種類に関係なかった () 洗濯物の種類別に順番に干していた () 物干しの外側(手前)から干していた () 物干しの内側(奥)から干していた () 物干しの高さはなんでもよかった () 洗濯物が床につかないように干していた () ハンガーには適当に干していた () 襟や肩のラインを合わせて型崩れしないように干していた () いろいろな種類の洗濯物が混ざって干してあった () 干す場所は洗濯物の種類別になっていた	
11. 一通り干し終わったあとはどうしていましたか () すぐに片付けをしていた () 干したものを点検してから片付けていた	
12. 使ったも物の後片付けはどのようにしていましたか () 使ったものは干し終わった時の場所に置いておいた () 元あった場所に戻した	

5. 示範ビデオ

洗濯物を洗濯機から取り出し、干し終えるまでの過程を、「準備」、「洗濯機からの取り出し」、「干す」、「片付け」の4つに区分した。それらを上手く遂行するためのポイントを25項目設定し、示範ビデオでは音声の無い一連の行為として提示した。示範ビデオの作成では、家事の一部として手際よく洗濯物を干す作業を日常的に行っている研究者の中の一人が作業をしている場面を3回収録し、最も手際のよいものを選択した。選択した作業（示範ビデオとした作業）の所要時間は7分10秒だった。

なお、実験時の観察に用いたチェックリストはこの25項目で構成されている。

6. 分析方法

課題を上手く遂行するためのポイント25項目について、被験者の行為を研究者が判定し、適切な行為の実施率を求めた。被験者の行為の判定は、被験者1人につき3人の研究者が行い、2人以上の判定者が一致した判定を採用した。3人中1人は実験時の直接観察、2人はビデオ記録により判定した。ビデオ記録では判定できない項目は、実験時の直接観察による判定に従った。

被験者自身の自己評価として、実験終了後に、「どちらかというと上手かった」、「どちらかというと上手くないかった」の2段階での自己評価を求めた。

適切な行為の実施率および被験者による自己評価の2群の差について、カイ2乗検定を行った。

また、洗濯物を干す行為は普段の生活で行われていることであり、被験者の日常での頻度や方法によって行為が影響される可能性が考えられる。そこで、実験終了後、自記式質問紙を用いて、普段の洗濯物を干す機会や方法について確認した。

7. 倫理的配慮

日本看護協会の看護研究における倫理指針²⁾に準じて、研究目的、研究方法、実験日時、研究への自由意志による参加、参加しなくても教育内容や成績評価等には影響しないこ

と、プライバシーの保護、結果の公表方法等について文書と口頭で説明した。同意の確認は同意書により行った。実験前にビデオ撮影の同意を口頭で再度確認し、映像データは的確に保管した。

結果

1. 被験者の普段の洗濯物の干し方

1) 洗濯物を干す機会の頻度

普段は洗濯物を干す機会が「週に2～3回」と回答した被験者が最も多く、確認シート無し群10人（55.6%）、確認シート記入群7人（36.8%）であった。洗濯を干す機会は「ほとんどない」と回答した被験者は、確認シート無し群は2人（11.1%）、確認シート記入群は2人（10.5%）であった。普段の洗濯の頻度について、2群の有意差はなかった（表4）。

表4 普段、洗濯物を干す頻度

	確認シート なし群 n = 18	確認シート 記入群 n = 19
ほぼ毎日	2人 11.1%	3人 15.8%
週に2～3回	10人 55.6%	7人 36.8%
週に1回	2人 11.1%	2人 10.5%
月に2～3回	2人 11.1%	5人 26.3%
ほとんどしない	2人 11.1%	2人 10.5%

2) 洗濯物を干すときに、普段気をつけていること

洗濯物を干すときに普段気をつけていることについて、自由記載を求め、記述内容を分類した。

両群とも最も回答の多かった記述は、「しわをきちんと伸ばして干す」であり、確認シート無し群17人（94.4%）、確認シート記入群16人（84.2%）だった。ついで多かった記述は両群とも「隙間を空けて干す」「型崩れしないように干す」「洗濯ばさみを使う」であった。（表5）

表5 洗濯物を干すときに普段気をつけていること（自由記載／複数回答）

	確認シート無し群 n = 18		確認シート記入群 n = 19	
洗濯機から、種類別に分けながら取り出す	1人	5.6%	0人	0.0%
しわをきちんと伸ばして干す	17人	94.4%	16人	84.2%
洗濯物を汚れたものにつけない／汚さない	2人	11.1%	1人	5.3%
干す場所	1人	5.6%	3人	15.8%
種類別に干す	3人	16.7%	2人	10.5%
隙間を空けて干す	8人	44.4%	6人	31.6%
型崩れしないように干す	5人	27.8%	5人	26.3%
洗濯はさみを使う	5人	27.8%	5人	26.3%
落ちないようにする／風で飛ばされないようにする	2人	11.1%	1人	5.3%
その他	6人	33.3%	5人	26.3%

2. 適切な行為の実施率

課題を上手く遂行するためのポイント25項目について、適切な行為の実施率を求め、確認シート無し群と確認シート記入群との比較を行った（表6）。実施率の算出にあたっては、その作業を実施した人数を分母とし、観察時間内にその作業を遂行できなかった人数は除いて計算した。

「準備」の過程6項目中、両群とも90%以上の実施率だった項目は、「洗濯機から取り出すときにかごが近くにある」「干し始める前に物干しを用意する」の2項目だった。確認シート無し群と比較して、確認シート記入群の実施率が有意に高かった項目は、「干し始める前に洗濯はさみを用意する」「干し始める前にハンガーを用意する」の2項目だった。

「洗濯機からの取り出し」の過程3項目中、確認シート記入群の実施率が有意に高かった項目は、「洗濯機から取り出すときに軽くしわを伸ばす」「洗濯機から種類別に取り出す」の2項目だった。

「干す」過程の12項目中、両群とも100.0%の実施率だった項目は、「洗濯物を床につけない」「種類毎に順番に干す」「種類毎に干す場所をまとめる」の3項目だった。確認シ-

ト記入群の実施率が有意に高かった項目は、「隙間を空けて干す」の1項目だった。また、「しわをきちんと伸ばして干す」「折りたたみ式物干しには内側から掛ける」「一通り干した後に点検する」の3項目は、確認シート記入群の実施率が、確認シート無し群に比べて20%以上高かった。「干す動作に迷いが無い」については、確認シート無し群12人（66.7%）に対し、確認シート記入群は4人（21.1%）であり、確認シート記入群の方が有意に低かった。

「片付け」の過程4項目については、いずれも両群とも90%以上の実施率で、有意差はなかった。

普段は洗濯物を干す機会が「ほとんど無い」または「月2回」と回答した11人と、「週1回」「週2回」または「毎日」と回答した26人の実施率を比較した。「しわをきちんと伸ばす」の実施率において、「ほとんど無い」または「月2回」の人では8人（72.7%）、「週1回」「週2回」または「毎日」の人では11人（42.3%）であったが、有意差はなかった。

表6 適切な行為の実施率

* P < 0.05

		全体 n = 37		確認シート なし群 n = 18		確認シート 記入群 n = 19	
準 備	最初に洗濯機の中を覗く	21	56.8%	9	50.0%	12	63.2%
	かごをワゴンの上に置く	35	94.6%	16	88.9%	19	100.0%
	洗濯機から取り出すとき、かごが近くにある	36	97.3%	17	94.4%	19	100.0%
	干し始める前に、物干しを用意する	36	97.3%	17	94.4%	19	100.0%
	干し始める前に、洗濯はさみを用意する	21	56.8%	6	33.3%	15	78.9% *
	干し始める前に、ハンガーを用意する	21	56.8%	6	33.3%	15	78.9% *
取り 出す	洗濯機から、軽くしわを伸ばしながら取り出す	28	75.7%	11	61.1%	17	89.5% *
	洗濯機から、1枚ずつ取り出す	34	91.9%	15	83.3%	19	100.0%
	洗濯機から、種類別に分けながら取り出す	32	86.5%	13	72.2%	19	100.0% *
干 す	干すときに、かごが物干しの近くにある	33	89.2%	18	100.0%	15	78.9%
	しわをきちんと伸ばして干す	19	51.4%	7	38.9%	12	63.2%
	重ねないで干す	34	91.9%	17	94.4%	17	89.5%
	洗濯物を床につけない	37	100.0%	18	100.0%	19	100.0%
	種類毎に順番に干す	37	100.0%	18	100.0%	19	100.0%
	種類毎に干す場所をまとめる	37	100.0%	18	100.0%	19	100.0%
	折りたたみ式物干しは内側から干す	29	78.4%	12	66.7%	17	89.5%
	隙間を空けて干す	32	86.5%	13	72.2%	19	100.0% *
	ハンガーは肩のラインを合わせる	17	54.8% (n = 31)	9	56.3% (n = 16)	8	53.3% (n = 15)
	洗濯はさみを使う	28	90.3% (n = 31)	14	87.5% (n = 16)	14	93.3% (n = 15)
	干す動作に迷いが無い	16	43.2%	12	66.7%	4	21.1% *
一通り干した後、点検する	11	57.9% (n = 19)	5	41.7% (n = 12)	6	85.7% (n = 7)	
片 付 け	ワゴンを元の位置に戻す	15	93.8% (n = 16)	11	91.7% (n = 12)	4	100.0% (n = 4)
	かごを元の位置に戻す	15	93.8% (n = 16)	10	90.9% (n = 11)	5	100.0% (n = 5)
	洗濯はさみを元の位置に戻す / 余りがない	16	100.0% (n = 16)	12	100.0% (n = 12)	4	100.0% (n = 4)
	ハンガーを元の位置に戻す / 余りがない	16	100.0% (n = 16)	12	100.0% (n = 12)	4	100.0% (n = 4)

3. 確認シートの解答との関係

確認シートの設問17項目を全て正解した被験者は、17人中10人(58.8%)だった(表7)。最も少ない正解数は14問だった。質問項目のうち全員が正解した項目は10項目だった。確認シートが不正解だった項目は、実験時に不適切な行為となる傾向があった。(表8)

4. 被験者による自己評価

実験終了後、被験者に、「どちらかというとうまくいった」「どちらかというとうまくいかなかった」の2段階での自己評価を求めた。「どちらかというとうまくいった」と回答した被験者は、確認シート無し群は10人(55.6%)、確認シート記入群は2人(10.5%)で、確認シート記入群の方が有意に低かった(表9)。

表7 確認シートの正解数

17問(全問)	10人	58.8%
16問	5人	29.4%
15問	3人	17.6%
14問	1人	5.9%
合計	19人	100.0%

表8 確認シートの解答と不適切な実施

確認シート	該当するポイント	確認シート正解者		確認シート不正解者	
		正解者人数	不適切な実施者数	不正解者人数	不適切な実施者数
問1	作業の順序	15	3	4	3
問2	最初に洗濯機の中を覗く	18	5	1	1
問7	干し始める前に洗濯はさみを用意する 干し始める前にハンガーを用意する	16	2	3	2
問9	しわをきちんと伸ばして干す	18	6	1	1
問10	隙間を空けて干す	17	0	2	0
問10	折りたたみ式物干しは内側から干す	17	0	2	2
問10	床につかない	18	0	1	0

表9 被験者による自己評価

	確認シートなし群 (N=18)		確認シート記入群 (n=18)	
どちらかというとうまにできた	10人	55.6%	2人	10.5%
どちらかというとうまにできなかった	8人	44.4%	16人	84.2%
無回答	0人	0.0%	1人	5.3%

考 察

1. 確認シート記入による適切な行為の実施率への影響

課題を上手く遂行するためのポイント25項目について、適切な行為の実施率を求め、確認シート無し群と確認シート記入群との比較を行ったところ、全般的に確認シート記入群の実施率が高い傾向にあり、5項目については有意差があった。

今回の実験結果からは、確認シートを記入した方が適切な行為の実施率が高くなった理由として、「行為の意図の理解」と「期待される行為の理解」の2つがあると推測された。

示範ビデオでは、洗濯機から取り出した洗濯物をかごに入れ、洗濯ばさみとハンガーを用意し、干す作業にとりかかる行為が無言で進行する。注意深く観察すれば、1枚ずつ取り出して分別しながらかごに入れていることや、干し始める前に必要な道具を必要な量準備する順序に気づき、ビデオ観察時に呈示されたポイントの中の「洗濯機から取り出しながら種類と量を確認する」という記述と照合できる。確認シート記入群の被験者は、それに加えて、設問の解答として「洗濯物の種類を確認し、それらを干すために必要なものを見積もっていた」という選択肢や、「洗濯物の種類別に順番に干していた」という選択肢を読み取り選択することにより、分別してかごに入れておく意味や、かごに取り出してから洗濯ばさみやハンガーを用意する理由を確認し、示範行為の実施者の意図を明確化した上で実施できたと考えられる。

また、干す過程の中で、2群間の差が大きかった「しわをきちんと伸ばして干す」「隙間を空けて干す」は、両群の被験者ともに、普段洗濯物を干すときに気をつけていることとして記述数の多かった項目である。普段気をつけているということは、示範ビデオで該当する行為に気づく確率は高く、自己のやり方と比較しながら示範ビデオの行為に注目していたと考えられる。このような行為の実施率が2群間で差があったということは、確認シート記入群の被験者は、干し方に関する設問に解答しながら示範ビデオで示された行為を反

芻し、どの程度の動作をすることがしわを伸ばすことになるのか、どのくらい空けることが隙間を空けたことになるのかといった、期待される行為を認知して行動したのではないかと推測される。

2. 確認シート記入による「迷い」の出現

齊藤らは看護知識や経験のない大学生を被験者として、看護師が仰臥位の模擬患者を車椅子に移乗させる模範ビデオ見せた後、その動作を模倣させる実験を行っている。被験者の非円滑な動作（よどみ）の生起頻度を算出したところ、模範ビデオの最初のフレームと最後のフレームを印刷した静止画のみを呈示したときが最もよどみ数が少なく、その理由のひとつは被験者各自の判断に基づく動作が遂行されたことによると報告している。

今回の実験結果では、確認シート無し群と比較して、確認シート記入群の方は一つひとつの作業が連続せず、迷いながら実施する様子が観察された。また、確認シート記入群の方が、後片付けまで全て遂行できた被験者が少なかった。示範ビデオの方法と照合し確認しながら作業をしているために、このような動きになったと推測される。確認シート記入群の方が適切な行為の実施率が高く、自己評価が低かったことと考え合わせると、確認シートによって模倣すべき行為や手順が認知され、それを忠実に丁寧に実施しようとしたと説明できる。今回は1回だけの試行であったが、繰り返し試行することで全体が繋がり、適切で滑らかな行為となると期待される。

3. 示範教材観察後の確認シート記入の意味

筆者らが担当する基礎看護学領域の看護技術演習では、講義で得た知識を、事前課題を解くことによって想起し、技術ポイントや手順を示した要項をそれと関連付けながら熟読してから演習に臨ませている。演習では、教員が技術ポイントを説明しながらデモンストレーションをした後に、学生が手順どおり実施する方法をとっている。しかし、その動作や作業の目的や原則を理解せず、ただ手順を暗記して行動している状況が見られる。

示範ビデオを観察した後に確認シートを記

入してから実施した群のほうが、適切な行為の実施率が高く、丁寧に作業を行う傾向がみられた。このことから、一連の模範的な行為として示された技術ポイントを実施前に再確認する機会を与えることは、手順をイメージしながらも主体的に目的や原則に沿って実施するための方法として有効だと考える。

4. 研究の限界

今回の実験で取り上げた実験課題は、日常的で、作業目標や作業方法を想定しやすい作業であり、所要時間は7分程度の短いものであった。しかし、実際の看護技術演習でのデモンストレーションは20分以上かけて行われる。また、学生は初めて経験する技術を見て実施することが求められる。多くの要素で形成され、時間を要し、特定の機能を有する作業の記憶を保持するのは困難である。確認シートは、デモンストレーションの内容を想起したり、作業目標を把握したりする手助けになることが予測されるが、今回の実験からは不明である。

また、今回は確認シートの正解を提示しなかったため、示範ビデオを誤って認知していた場合は、その後の実施も不適切となる傾向がみられた。示範教材を適確に認知できたことを確認する重要性が示唆されたが、被験者数が少なかったため明らかにできなかった。「わかる」と「できる」は異なることもよく知られている事実である。示範教材の認知のし方や、認知のし方と実施状況との関係については今後の課題としたい。

結 論

1. 示範ビデオ観察後に、呈示された作業順序や作業方法、行為の意図について確認するための質問シート（確認シート）に解答してから作業を実施した群は、確認シート無し群と比較して、適切な行為の実施率が高かった。
2. 確認シートに解答してから作業を実施した群は、行為に迷いがみられた。
3. 示範観察後に再確認する機会を実施前に与えることは、手順をイメージしながらも

主体的に目的や原則に沿って実施するための方法として有効である。

謝辞

本研究を実施するにあたりご協力いただきました学生の皆様に深く感謝いたします。

本研究は、新潟青陵大学共同研究費（平成19年度）の助成によって行われた。

引用文献

- 1) 樽井恵美子. 学生の観察意識を高めるデモンストレーション（バイタルサイン）の効果的活用. 日本看護学会論文集看護教育. 2001; 32: 128-130.
- 2) 日本看護協会. 看護研究における倫理指針. 17-19. 東京: 日本看護協会; 2004.
- 3) 斉藤洋典 山本裕二 白石知子. 行為の理解と模倣をつなぐ「よどみ」のはたらき 看護動作の学習における観察と模倣. 電子情報通信学会技術研究報告. 2005; 105 (358): 1-6.

参考文献

- 1) 春木豊. 観察学習の心理学 モデリングによる行動変容. 東京: 川嶋書店; 1982.
- 2) 小泉仁子 日下和代 千葉由美他. 看護実践能力育成の充実に向けた電子媒体による技術チェックリストの検討. 看護教育. 2005; 46 (1): 13-22.
- 3) 小松原明哲. 示範教材と自身の作業方法の比較による技能育成方法の有効性について. 日本プラント・ヒューマンファクター学会誌. 2002; 7 (2): 97-104.
- 4) 櫻井利江 浅野美礼. 教養教育を礎とする基本看護技術演習 プログラムの開発指針と今後の課題. 看護研究. 2007; 40 (1): 11-19.
- 5) 櫻井利江 浅野美礼. 看護基本技術の具体的展開方法. 看護研究. 2007; 40 (1): 21-33.
- 6) 白石知子 斉藤洋典 益田尚史. 看護行為の理解と遂行を規定する諸要因の検討. 電子情報通信学会技術研究報告. 2000; 100 (331): 25-30.
- 7) 菅原真優美 小山聡子 倉井佳子他. 看護技術の自己学習を目的とした動画ストーリーミング教材

- の製作と評価．新潟青陵大学紀要．2004；4：123-135．
- 8) 竹尾恵子監修．Best 臨地実習のための看護技術指導ガイドライン．東京：学習研究社；2005．
- 9) 冨田幸江 佐々木美樹．看護技術習得過程における「段取りシート」活用の意味 学生の技術演習前・後の段取りシート記入に関する意識調査を通して．つくば国際短期 大学紀要．2005；33：89-103．

